

特集 神奈川県博物館協会主催講演会 知っておきたい博物館の話「学芸員の現場」の開催

平成28年度神奈川県博物館協会人文科学部会幹事
小井川 理（神奈川県立歴史博物館）

「学芸員とは、どのような仕事か。」

時にはほほえましい好奇心を込めて、時には深奥な哲学を孕んで、私たち学芸員に向けられてきた問いである。しかし、その答えは単純明快ではない。専門性を有した研究者としての理想。資料の一番近くににいるという責任。「雑芸員」と名乗ることに込められた一見自虐的な、しかし確かな自負。一それぞれの学芸員が、さまざまな思いを抱えて、この仕事に就いている。

神奈川県博物館協会では、平成17年（2005）協会創立50周年を記念して『学芸員の仕事』を、平成27年（2015）には60周年を記念して『博物館の未来をさぐる』を刊行し、多種多様な魅力を持つ加盟館園の学芸員の仕事を紹介してきた。この10年余、社会状況の変化とともに、博物館のあり方、学芸員に求められる役割も少しずつ変わってきた。しかし「現場」に立つという一点は、昔も今も変わらない。変わったもの、変わらないものを織り交ぜ、「今」に向き合う学芸員の声から、「学芸員の仕事」を問い直したい。

神奈川県博物館協会には、美術館、博物館、動物園、水族館など90を超える多彩な館が加盟する。公立、私立、大学附属など運営形態も異なり、複数の学芸員が常勤として勤務する施設から、専門の学芸員は一人のみという施設まで、スタッフの構成も一様ではない。そうした多様な館園が共通して抱える問題として、「学芸員の現場」が今、どのような期待を向けられ、どのような課題に直面しているのか、具体的な活動から今一度考えてみたい、というのが、この講演会を企画したきっかけである。

ともに協会活動に携わってきた館園の中には、指定管理者制度の導入等によって運営形態が大き

く変化した施設もある。ゆったりとした時間が流れているように見えても、来館者に心地よく楽しく資料や作品と向き合ってもらうために、見えないところでは、学芸員のみならず、職員全員が、時に自らの存在意義を問うような厳しい現実と向きあいながら、懸命な努力を続けているのが実状である。

学芸員という仕事をしていると、「趣味を仕事にした幸運な人びと」と言われることがある。しかし、ほかのすべての職業とおなじように、仕事であるからには常に責任を負っており、自らが成果を発信する使命と、所属する施設のあり方に一定の役割を果たすことが求められる。それは「仕事」であれば当たり前のことで、明らかに「趣味」とは違う。業務は多岐にわたり、調査研究や企画の立案などに没頭できる時間も限られる。その中で、学芸員を支えているのは、やはり「この仕事が好きだ」という情熱であるかもしれない。

「学芸員とは、どのような仕事か。」

講演会を終えて思うのは、それは学芸員にとって永遠の問いであるということである。変化する社会状況のなか、常に目の前の資料と向き合い、自らの仕事の精度を問い、なすべきことを考え続けるという点で言えば、永遠の問いでなければならぬ。自らの仕事の意味を問い続けることは、厳しい時間でもあろう。

しかし、その問いかけは、思いをともにする仲間たちと共有できる問いである。博物館協会講演会として、学芸員の仕事を問い直す機会が、使命と責任を共有し、不断の問いを分かち合うことのできる仲間がいるということ再認識できる場ともなったとすれば、この講演会を開催した意義があったといえるのではないだろうか。